

## 秋田藩銅役人の職制的考察

### A STUDY ON THE SERVICE REGULATIONS OF THE COPPER OFFICIALS IN THE AKITA HAN

博士後期課程 史学専攻63年入学

森 朋 久

TOMOHISA MORI

#### は じ め に

私は、秋田藩の銅役人の職制を述べる。秋田藩は、さまざまな鉱山資源に恵まれていたが、近世中期以降はとりわけ銅の生産が抜群であった。秋田藩は、元禄末期以降領内最大の阿仁銅山を御直山（藩営銅山）とし、さらに専売化し銅を支配した。

秋田藩が銅を支配するには、これを支配する役人、銅を担う役人が存在した。本稿では、この役人を銅役人とし、その職制的側面を明らかにしていきたい。

研究史にふれると<sup>1)</sup>、佐々木潤之介氏の論文では山元の役人について、石川博資氏の著書、荻慎一郎氏、渡部紘一氏の論文では惣山奉行下代について多少ふれている。しかし、秋田藩の銅担の役人を体系的に述べたものはなかったといえる。

さて、銅役人には、銅の生産から売買までに関わるさまざまな役人がいる。私は、大きく分けて3つの階層を考えている。これは、1. 奉行職、2. 下代、3. 手代頭、支配人以下である。この3つ分けて、銅役人の職制を明らかにしたい。それぞれの階層の考察の仕方は次の通りである。

奉行職は、銅役人のうち格が高い役人である。奉行職の職制は、宝暦5（1755）年に再設置された本方奉行を中心にみていく。本方奉行の系譜をみ、そして銅担の変遷をみていくことにする。この場合本方奉行の本来の職務、つまり財用方を担う過程もみていく。

次に、奉行よりは格が低い役人として下代をあげるが、これは惣山奉行下代の職制を明らかにしていきたい。

3番目に、上記2つの階層の内最も格が低く、直接山を支配する役人である手代頭、支配人の職制を述べる。またそれ以下の職制にも触れたい。

最後に、職務分担を述べ、3つの職制をまとめたい。

## 1. 奉行職の職制—本方奉行を中心に—

最初に奉行職の家格を述べ、次に本方奉行の系譜の解明をし、本方奉行の職制的成立過程における銅を担う過程を述べ、最後に奉行職の銅担の変遷について述べる。

まず、奉行職の家格である。これは、本方奉行の家格から述べていく。

秋田藩の家格としては、一門、引渡、廻座、一騎、駄輩、不肖等の家格があった。一門は、佐竹苗字衆五家、引渡は一門の次席にして門閥の首位一五家、廻座は譜代世臣または勲功将士、一騎（平士役）は上士で由緒ある者で150石以上、駄輩（平士役）は90石以上、不肖は30石以上であった<sup>2)</sup>。

この格順（家格）と藩の役職順（役）は元禄期頃から一致しており、役相当の格の者がその役を務めた。本方奉行の場合は、一騎相当150石である<sup>3)</sup>。本方奉行廃止後の勘定奉行、銅山奉行も平士役150石であった<sup>4)</sup>。これから述べる裏判奉行、惣山奉行も本方奉行と同系統にはいるので、平士役であったと考えられる。

次に、奉行職の職制を宝暦5年に再設置された本方奉行を中心にみていく。前述の様に、本方奉行の系譜を解明する。これは、宝暦5年の本方奉行に至るまでにどのような役職系統を統合していったのかをみていく。言い替えれば、本方奉行の成立過程をみていくのである。これにより従来あまり明らかになっていない本方奉行を成立過程から解明することになる<sup>5)</sup>。

また、この本方奉行は銅役人であったから、本方奉行の系譜を解明することは本方奉行が銅を担う過程を明らかにすることにもなる。さらに、本方奉行の成立過程においてどのように本方奉行が銅役人となったのかを明らかにできよう。

本方奉行は、3つの役職系統を統合して成り立った。これは、①裏判奉行、②惣山奉行、③本方役人である。それぞれの系統を述べ、それがどういう過程を経て本方奉行になったのかを述べる。

ただし、ここでは本方奉行が銅担となる過程のみをふれるので、最後(④)に、奉行の銅担の変遷についてまとめて述べる。

### ① 裏判奉行の系統

裏判奉行は、寛文3（1663）年に設置された<sup>6)</sup>。

この裏判奉行の定員は、「梅津忠宴日記」の延宝4（1676）年2月27日の記述をみると5名であったことがわかる<sup>7)</sup>。

裏判奉行の職務であるが、家士の知行、扶持受取物を審査し、文書に裏判をする役であったとされる<sup>8)</sup>。さらに、裏判奉行の支配から職務をみていこう。

裏判奉行は、裏判吟味役、米蔵役、雑用役、諍馬役、湊沖口役、金役、添川竈木払役、口米政免受取役、靱蔵役、春屋役、船越材木役、古物役、岩見山内十分一役、豊巻十分一役、馬役銭受取役、染屋、鋳師を支配した<sup>9)</sup>。この支配した役をみると、蔵米・金・役銀収集を支配する役、金役等米・金銭に対する役、さらに諍馬役、湊沖口役等役銀収集に関する役を支配したことがわかる。この役の内

役銀については、「多賀谷隆家日記抄」をよると、久保田に小役銀を課すことを裏判役所から言い渡していることが確認できる<sup>10)</sup>。

裏判奉行の職務は、この他財用担である。この財用担は、裏判奉行が単独で担っていた訳ではなく、御用所の合議であった。「多賀谷隆家日記抄」によると、寛文8（1668）年5月28日に家老多賀谷隆家が役銀について町奉行、勘定奉行、裏判奉行に尋ねている<sup>11)</sup>。延宝元（1673）年6月13日には、郡奉行、勘定奉行、町奉行、裏判役（裏判奉行）の月3度の御用日が定められた<sup>12)</sup>。

これより、財用担を御用所の一員として担っていたことがわかる。裏判奉行は、寛文4（1664）年には勘定奉行、物頭の上にくる官とされたので<sup>13)</sup>、御用所内でも中心となって財用方を担っていた。ただし、これは寛文・延宝初期の事であって、その後は、財用担は老中と裏判奉行の合議となった<sup>14)</sup>。

貞享2（1685）年には、進退積（財用）の改革が行われる。能代奉行1人、裏判奉行の内2人が財用方を担うことになった。これが同4年に本方役人となり、老中から選ばれた進退積大頭と共に財用方を担うことになった<sup>15)</sup>。この時に、いままで裏判奉行が担っていた財用担が、本方役に移ったのである。

元禄14（1701）年には、会所が建てられると同時に職制改革が行われた。そして、裏判役所は廃止され、裏判奉行も廃止された<sup>16)</sup>。

この理由としては、本方奉行が裏判奉行の主要な担である財用方を担ったため、裏判奉行の重要性が薄れたことが考えられる。

この様に裏判奉行がもっていた財用担は、本方奉行に引き継がれるのである。

## ② 惣山奉行の系統

惣山奉行は、慶長期には山奉行と呼ばれ院内銀山等を支配した。この役人の元祖としては、梅津政景がいた。梅津政景の場合、後の役人よりは家格が高い。この山奉行は政景以降廃止され、各鉱山に

表1 惣山奉行動務者名

任 命 年 月 日	名 前	注 記
慶 長 期 延宝3年3月 延宝8年3月21日 天 和 以 前 天和3年11月14日 元禄3年1月27日 同 6 年7月19日 同 14 年	梅津 主馬政景 黒沢 多左衛門 根元 正右衛門 小介川庄左衛門 (惣山奉行廃止) (勘定奉行兼帯) 根元 正右衛門 山 口 縫殿丞 田中 三左衛門 高瀬治部左衛門	黒沢多左衛門代わり  根元 町奉行、小介川 裏判奉行 になる  根元 町奉行、山口 勘定奉行兼帯 根田四郎右衛門代わり  本方奉行老職両担（惣山奉行兼帯）

（「鉱夫雑談」『国典類抄』（嘉部三）p.97 より作成）

は、一山限りの奉行、検使がつけられるだけであった。このような政策をとったのは、山の支配にはまだ積極的でなかったことと、院内銀山の衰退があげられる。

廃止された山奉行は、延宝3（1675）年に惣山奉行として再興された<sup>17)</sup>。務めた人物は表1の通りである。

まさに、この直前の寛文10（1670）年に阿仁銅山が開発されたので、この影響もあつての再興であろう。惣山奉行設置時、惣山奉行には黒沢多左衛門が任命された。

惣山奉行の支配をみていく。延宝4年の支配をみると、金山奉行と天秤座である<sup>18)</sup>。金山奉行は院内銀山、畑銀山、八森銀山、大葛金山、阿仁銅山等のそれぞれの山に置かれていた奉行である。阿仁銅山の場合、この時期秋田藩は御直山化せず、運上、役銀収集のみを行った<sup>19)</sup>。

この惣山奉行は、天和3年の職制改革により廃止された<sup>20)</sup>。この職制改革は、藩財政の窮乏の為にあった。表方諸役の入用の縮小のため、郡奉行、作事奉行と共に惣山奉行は廃止され、老職がこの役を担うことになる。しかし、すぐ後に惣山奉行は勘定奉行の兼帯となった<sup>21)</sup>。この時、阿仁銅山も勘定奉行の支配となった。

元禄14（1701）年の職制改革では会所政治が始められ、町奉行、勘定奉行、本方奉行が一行に3奉行とされた<sup>22)</sup>。同年阿仁銅山が御直山になり、山方の職制も改革された。それまで、勘定奉行の兼帯であった惣山奉行は止められ、山方（惣山方）は、家老のうち梅津半右衛門と本方奉行のうち2名・副役のうち1名が支配に当たることになった<sup>23)</sup>。そして、本方奉行の銅山支配はこの時に始まった。

### ③ 本方役人の系統

本方役、本方奉行は、財用担として設置された。設置されたのは貞享4年であるが、その端緒は同2年に求められる。

貞享2（1685）年には、財政の不如意により財用方改革が行われた。そして、能代奉行山方助右衛門、裏判奉行のうち田代新右衛門、小介川庄右衛門が本役兼役のまま財用担となった。また、台所役から鯨岡文右衛門が本方手伝役になった。さらに、家老から梅津半右衛門が進退積大頭を担うことになった<sup>24)</sup>。つまり、貞享2年の財用方改革では、奉行級の者と家老梅津半右衛門が財用担となった。

この貞享2年の段階では、山方、田代、小介川は本役兼役のまま財用方を担った。さらに2年後の貞享4年には、この3人と手伝役鯨岡は本方奉行に任命され、財用担が本役となった。また、同年半右衛門が務めていた進退積大頭も本方役とされた<sup>25)</sup>。後に、本方役の家老担は梅津半右衛門の訴訟により月番とされた<sup>26)</sup>。

この様に、貞享2年に財用担となった家老と役人が貞享4年には財用専任となり、本方役となった。ここにおいて、本方奉行が財用担として現れてくるのである。これは、以前家老の指揮下に裏判奉行が担っていた財用担が本方役に移ったことを意味する。

元禄7（1694）年には家老の本方担が改革され、梅津半右衛門が本方惣頭となった。本方惣頭は、秋田六郡を支配するものと江戸を支配するものが設置された<sup>27)</sup>。それと同時に、本方役人に支配され

表2 三奉行副役名前書き上げ

町奉行		梅津大藏 小野岡形部右衛門
勘定奉行		長瀬徳右衛門 田崎治左衛門
本方奉行	秋田	鈴木平藏 秋山喜右衛門
	江戸	田中勘兵衛 信太左衛門
	上方	吉原五右衛門
副役	秋田	中川兵左衛門 大山文右衛門 赤石助右衛門 山方清兵衛
	江戸	鮫岡四郎兵衛

(享保10年4月21日『国典類抄』(嘉部二) p. 289))

ていた役が、本方惣頭と本方役人(本方奉行)で折半された<sup>28)</sup>。

元禄14(1701)年には、綱紀肅正のため城中に会所を建て、月番家老と役人を集めて諸事を評議することになった。この時、町奉行、勘定奉行、本方奉行は、一列に三奉行とされ、御用達役は副役となった<sup>29)</sup>。この時点で、本方奉行は、町奉行、勘定奉行と同格となった。本方奉行の人数については表2の通りで全部で5名であり、秋田・江戸各2名、上方は1名であった。

本方奉行は、享保6(1721)年以降改革されていく。享保6年に仮に会所を政務所とし、職務の改正を行った。政務所では家老が政務を行うことになり、町奉行、勘定奉行、本方奉行は政務所に連絡をとるために出席することになった。この時本方役所は会所から切り放され、二の丸に移り財政評議を行うことになった<sup>30)</sup>。この改革では、従来の会所政治よりも本方奉行の直接政務への関わりが薄くなったことがわかる。

さらに、享保10(1725)年本丸に御用所ができると会所が廃止された<sup>31)</sup>。そして、本方奉行の財用担は家老が担うことになり、本方奉行も廃止された。さらに、家老の支配下に吟味役を置いた。本方奉行は、この後一同勘定奉行となった<sup>32)</sup>。

本方奉行は、財政評議と裏判等財政関係の実務を行っていたが、享保10年の改革では財政評議が家老に移り、本方奉行改め勘定奉行は、財政関係実務のみを行うことになった<sup>33)</sup>。

この改革は、すぐに失敗してしまう。享保12(1727)年には、財用担の内重要なものは勘定奉行と町奉行が担うことになり、家老支配下の吟味役も勘定奉行の支配となった<sup>34)</sup>。

それでも効果が表れず藩財政は悪化し、さらに享保12年に勘定奉行が財用担となったものの、享保10年の改革で政務所と諸役所を切り放したために職務がうまく行かない<sup>35)</sup>。そこで、享保16(1731)年には、政務所と勘定奉行吟味役所をまとめることにした。さらに、勘定奉行を財用方勘定奉行と勘定調方勘定奉行にわけた<sup>36)</sup>。財用方勘定奉行は、享保10年以前の本方奉行と変わらず、結局本方奉行はこの時点で復活したのである。

財用方勘定奉行は、宝暦5(1755)年には本方奉行となった<sup>37)</sup>。宝暦13年当時の本方奉行の構成をみていこう。表3にある通り、本方奉行は11名である。勤務地は秋田・江戸・上方・阿仁の4ヶ所に分れ、宝暦13年10月には、江戸2名、秋田(久保田)6名、上方2名、阿仁1名である。各場所の本方奉行は1つの場所に留まるのではなく、各場所へ移動した。例えば、宝暦13年に秋田で本方奉行と

表3 宝暦13年10月 家老、三奉行、能代奉行、副役メンバー

家 老	江 戸	石塚市正 今宮大学 大塚九郎兵衛
	秋 田	小野岡市太夫 疋田久太夫 小楊源左衛門 梅津藤太
能代奉行	能 代	牛丸市左衛門 秋田 平元茂助
町 奉 行		桜田喜市郎 黒沢四郎兵衛
勘定奉行		寺崎弥太夫 武藤七太夫 小野崎忠助
本方奉行	江 戸	太田内蔵丞 太田市兵衛
	上 方	丹宗十郎 大塚源内
	阿 仁	黒木権右衛門
	秋 田	石川縫殿允 小田部縫殿右衛門 茂木祐右衛門 石川又左衛門 岩屋弥兵衛
		石井庄左衛門
副 役	江 戸	滑川武右衛門
	秋 田	小野崎靱負 吉川和助 信太儀右衛門 鈴木与一左衛門 片岡七十郎

〔「石井忠運日記」(1) (歴史図書社) pp. 329-331〕

なった石井庄左衛門は、安永元年に職を免ぜられるまで江戸1回、上方2回にわたり務めた<sup>38)</sup>。

また、秋田においては藩政の中心である会所の一員であった。会所は、家老、本方奉行、勘定奉行、町奉行、能代奉行、副役で構成された。さらに会所においては、町奉行、勘定奉行とともに一方という評議集団を形成した。一方は、同役では解決出来ないことを評議する場合に行われたが、家老と交渉上同役のみでは解決がつかない場合一方で交渉すると言うような、家老に対する一種の圧力団体でもあった<sup>39)</sup>。

この宝暦5年に再設置された本方奉行の職務の中心は財用担である。財用担は古くは裏判奉行、本方役人が担っていたが、これを合わせたため本方奉行が財用担となったのである。

以上、裏判奉行、惣山奉行、本方役人の3つの系統から本方奉行の系譜、つまり成立について主に財用方から述べた。

#### ④ 銅役人の変遷

以上を踏まえて銅役人の変遷について述べる。

②で述べたように、惣山奉行が担っていた山方は、勘定奉行の兼帯となった。その後、山方担は本方奉行が兼帯することとなった。則ち元禄14年に会所が建てられ、本方奉行は町奉行、勘定奉行と共に3奉行とされた。この時惣山方の職制改革も行われ、惣山方は勘定奉行兼役から家老梅津半右衛門が支配し、本方奉行のうち清水忠兵衛、村山九左衛門、副役のうち武石安右衛門が兼役として務めることになったのである<sup>40)</sup>。この山方の職制改革は、阿仁銅山の御直山化に対応して行われたものである。つまり、山方を本方に組み込むことにより、鉾山の藩営銅山化を徹底的にしたのである。この時期以降、阿仁銅山を含めた銅山中心に秋田藩の鉾山政策が進む。

享保10(1725)年に本方奉行が廃止されると、山方は勘定奉行の支配となった<sup>41)</sup>。しかし、享保16年に財用方勘定奉行が設置されると、山方支配は財用方勘定奉行が兼帯することになった。元文2

年から延享2年にかけて5度にわたり財用方勘定奉行秋山光春が阿仁銅山で銅山改革を行ったこと<sup>42)</sup>、財用方勘定奉行が長崎御用銅について交渉していることからわかる<sup>43)</sup>。惣山方を支配した財用方勘定奉行は山元では惣山奉行と称しており<sup>44)</sup>、惣山奉行を兼帯していたことがわかる。

宝暦5年に本方奉行が再設置されると銅担は本方奉行が担うこととなった<sup>45)</sup>。

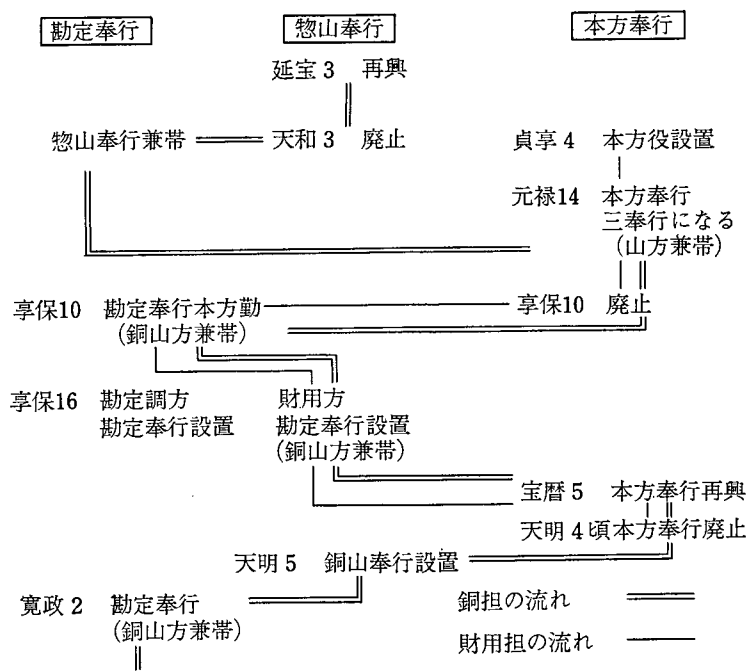
天明4年頃に本方奉行が廃止され、天明5(1785)年に銅山奉行が設置されると、銅山方は本方奉行から銅山奉行に移る。この銅山奉行は銅山ばかりでなく、鉱山全てを支配することとなった。この銅山奉行は寛政2年に廃止され、この後は鉱山は勘定奉行支配となった<sup>46)</sup>。

この様に、本方奉行が銅山を支配するようになったのは、元禄14年にそれまで勘定奉行が兼帯していた惣山方を担うことになったことに端を発している。この理由としては、第1に本方奉行が江戸、上方、秋田(久保田)で務めていたことがあげられる。銅役人は結びであげるように、この3ヶ所で務める必要があった。また第2の理由として、山方が財政にとって重要であったこともあげられる。秋田藩は元禄以降慢性的財政難にみまわれ、その補填を鉱山、特に銅山に求めた。従って銅担が財用担職に兼帯されるのは状況的にも必然であったといえよう。従って、本方奉行が銅役人となるのも、必然的であった。

さて、惣山奉行が廃止された後は、惣山方は本方奉行、勘定奉行等に支配される。この場合惣山方を支配した奉行は、惣山奉行職を兼帯したのであった。実際鉱山職務の場合、惣山奉行と称していた。

したがって、阿仁銅山開初以来銅山は、惣山奉行または惣山奉行兼帯職に支配されていたのであ

図1 奉行職の職制の変遷



る。言い替えれば、銅役人のうち奉行職の役人は惣山奉行または惣山奉行兼帯職であったと言える。なお、奉行級の職制の変遷をまとめたのが、図1である。

## 2. 下代（惣山奉行下代）の職制

惣山奉行の名前が史料にでてくるのは、寛文4（1664）年であるが、惣山奉行下代という名称がでてくるのは、正徳年間である。しかし、山役人としての下代は、割合早い時期にみられる。

「院内銀山記」の諸役人衆新参の事では、下タ代のことを記しており、院内銀山に山仕置奉行職が置かれ政務執行に当たったが、下代がいなければ政務がうまく行かないので、諸浪人の内より一番に備前宇喜多中納言家臣田太市右衛門、二番に越前佐藤善左衛門、三番中村舎人を任命したということが記されている<sup>47)</sup>。

この下代は山長とも呼ばれるが、むしろこちらの名称で一般的になり寛文6年まで存続するが、それ以降はみられなくなる<sup>48)</sup>。

一方、阿仁銅山の方に目を向けてみよう。阿仁銅山では、下代がでてくるのは、院内銀山よりかなり後になる。すなわち、元禄14（1701）年阿仁銅山が御直山とされたときに、手代頭に任命された加々美半兵衛が正徳2年に死んだ後、惣山奉行下代のうち安東幸左衛門が小沢銅山を吟味した、ここにおいて、惣山奉行下代が初めて現れるのである<sup>49)</sup>。安東幸左衛門の祖父は土佐と名乗り、阿仁銅山開初、すなわち北国屋の受山であった時に、水無番所で銅箇を調べ運上を取る役を勤めており、鉱山役人であった<sup>50)</sup>。

はじめに、惣山奉行下代の支配、つまりどのような役職に支配されてきたかを述べていこう。惣山奉行下代が初めて設置された時期は分からない。そこで、正徳2（1712）年から話をはじめていく。正徳2年当時阿仁銅山は、本方奉行の支配にあった<sup>51)</sup>。また、享保10年には本方奉行が廃止され、この時それまで本方奉行が兼帯していた惣山奉行は勘定奉行の兼帯となり、勘定奉行は惣山奉行下代、山師等も支配することになった<sup>52)</sup>。この2点より、惣山奉行下代は正徳2年から享保10年までは本方奉行支配下、それ以降は勘定奉行支配下であったことがわかる。

享保16年には、勘定奉行が勘定調方と財用方に分かれ、財用方勘定奉行は元の本方奉行の様に勤めることになった。この時惣山奉行も財用方勘定奉行の兼帯となり、惣山奉行下代も財用方勘定奉行の支配となった。財用方勘定奉行秋山喜右衛門が阿仁銅山を廻山した時に、惣山奉行下代杉原伝兵衛、小林喜惣太が同伴したことからもわかる<sup>53)</sup>。

宝暦5（1755）年には財用方勘定奉行が廃止され、元禄14年の改正と同じように本方奉行が再設置された。この時惣山奉行も再び本方奉行兼帯になり、惣山奉行下代も本方奉行の支配となった。「安永九年本方奉行分限帳」では、本方奉行の支配に惣山奉行下代が含まれている<sup>54)</sup>。

天明4年頃に本方奉行は廃止され、天明5年には銅山奉行が設置される。銅山奉行が設置されると、惣山奉行下代は銅山奉行の支配となる。安政2年改正「藩士分限禄取扶持方各郷土給禄名調」は安政2（1855）年改正であるが、銅山方の内容をみると銅山奉行支配町人の事が書かれているの



で、銅山奉行設置の間、天明5年から寛政2年までの分限帳である<sup>55)</sup>。これによると、惣山下代杉原兵助は銅山方に属していた。銅山方は銅山奉行の支配にあったから、惣山奉行下代は銅山奉行の支配にあったことが分かる。

その後、寛政2（1790）年に銅山奉行が廃止されると、惣山奉行下代は勘定奉行支配になった<sup>56)</sup>。

以上、惣山奉行下代がどのような役職に支配されてきたかを明らかにした。惣山奉行下代は、本方奉行、勘定奉行、銅山奉行等惣山奉行兼帯職に支配されてきたのである。

また、惣山奉行下代の支配した役職であるが、支配人と（手代）手代頭であり、惣山奉行下代は、銅山のみではなく、諸山を支配する役人であった<sup>57)</sup>。

次に、惣山奉行下代の分限について述べる。惣山奉行下代は、秋田藩の分限の中では、士分ではなく足輕的身分であった。これは、惣山下代杉原謙治が実子がなく実弟順吉を養子にする願を出した時に、40歳以下なので諸士であれば養子に出来ないが諸士でないので認められた、ということから分かる<sup>58)</sup>。

惣山奉行下代の手当をみていこう。正徳年間は、惣山奉行下代の手当は5合5人扶持給銀7枚であった。これは安東幸左衛門が加々美半兵衛の後惣山奉行下代兼手代頭になるが、手代頭としての給金20両の他に、惣山奉行下代の手当5合8人扶持給銀7枚を久保田で受け取った。しかし、この手当のうち3人扶持は享保2年に安東幸左衛門に褒美として与えられたものであるから、惣山奉行下代の実際の手当は、5合5人扶持給銀7枚であったと考えられるからである<sup>59)</sup>。

また、延享2年に小沢銅山の改革が行われて、惣山奉行下代杉原伝兵衛が手代頭となった以降、伝兵衛に手代頭の手当合力古金20両と1ヶ月米4斗4升2合5勺の他、惣山奉行下代の手当5人扶持給銀7枚が与えられた<sup>60)</sup>。これにより、延享期以降惣山奉行下代の手当が5人扶持給銀7枚であったことが分かる。この手当は、正徳期とほぼ変わらない。

さらに、安永期をみてみよう。前掲「安永九年本方奉行分限帳」では、惣山奉行下代安東武右衛門、杉原兵助に5人扶持給銀7枚外宿賃銀1ヶ年文銀235匁ずつ筆墨代文銀24匁が与えられたことが分かる<sup>61)</sup>。これも、正徳・延享期と余り変わらない。

最後に、「藩士分限禄取扶持方各郷士給禄名調」によると、天明・寛政期に惣山下代杉原兵助・安藤幸治が5人扶持7枚、石田久四郎が3人扶持錢100貫目を得ている<sup>62)</sup>。前者2名については、延享、安永期と変わらないが、最後の1名は手当が少ない。安永期においては、惣山奉行下代の手当が同じであるから、それまでは惣山奉行下代うちでは同じ待遇であったろう。しかし、天明・寛政期になって惣山奉行下代内で手当の違いがでたのは、惣山奉行下代うちでも階層が出来たのか、そうではないのかは分からない。

以上、惣山奉行下代の分限についてみてきた。惣山奉行下代は諸士には含まれず足輕身分であり、手当は初期はだいたい5人扶持給銀7枚であった。

さて、惣山奉行下代を勤めた人物をみていこう。表4は惣山奉行下代を勤めた人物を列記したものである。表4をみてわかることは、安東、杉原という姓を持った人が多いことである。つまり、安東

表4 惣山奉行下代名前

年 月 日	名 前	出 典
元禄12年	安東幸左衛門	萩論文
正徳2年9月	杉原専右衛門	同上
正徳2年12月	安東幸左衛門	「秋田金山旧記」 (小沢手代頭兼帯)(5人扶持給銀7枚他小沢山手代頭給20両)
延享3年	安東清右衛門	「旧書集摺」
享保9年	杉原伝兵衛	「旧書集摺」「阿仁銅山次第聞書」 (5人扶持給銀7枚)
享保19年4,16	小林喜惣太	「旧書集摺」
	安東与治兵衛	
延享2年	杉原伝兵衛	「秋山光春日記結要」 (小沢手代頭になる)
明和6年	杉原専右衛門	「旧書集摺」「石井忠運日記」
明和6年	加賀美半兵衛	「石井忠運日記」
宝暦10年	安東武右衛門	「旧書集摺」
明和6年4月	杉原兵助	「旧書集摺」 (上2人 5人扶持給銀7枚他宿賃銀1ヶ年234匁筆墨代24匁)
(天明寛政期)	安藤幸治	「藩士分限禄取扶持方各郷士給禄各調」 (5人扶持給銀7枚)
	石田久四郎	「同上」 (惣山奉行下代見習)(3人扶持100貫文)
文化5年12月	杉原伝兵衛行弼	「行弼鑛山覚書」
文化8年8月	杉原長治行天	「旧書集摺」萩論文
(文政13年)	杉原寛助	「(銅山覚)」
天保15年	杉原謙治	「荒谷家文書634-2」
	安東鎮之助	
元治元年	杉原順吉	「荒谷家文書470」

(但 元禄12年、正徳2年9月、文化8年8月、元治元年は惣山奉行下代となったときを示し、あとは、史料上の初出年である)

氏と杉原氏は代々惣山奉行下代を世襲していた。安東氏については、先祖は寛文年間水無番所にいたものである。一方杉原氏は、『院内銀山記』より山長、つまり下代として慶安4(1651)年から承応2(1653)年まで勤めた杉原三郎右衛門がいたことがわかるが、これが杉原氏の先祖である<sup>63)</sup>。その子理兵衛は山当番役を勤め、理兵衛の子専右衛門が跡役を引継ぎ、後にその子の専右衛門が惣山奉行下代となった。専右衛門は惣山奉行下代となってから、伝兵衛と称した<sup>64)</sup>。

これ以降の世襲についてはっきりとした関係を示せるのは少ないが、分かるものをあげる。まず、初代杉原伝兵衛と杉原専右衛門である。これは、明和6(1769)年杉原伝兵衛が院内銀山の廻山に同伴したときに、伝兵衛の子供である杉原専右衛門が阿仁で務めていたからである<sup>65)</sup>。専右衛門は同年6月には惣山奉行下代に仰付けられた<sup>66)</sup>。また、専右衛門は杉原兵助の父親であることが『旧書集摺』の記述から分かる<sup>67)</sup>。

次に、惣山奉行下代がどの様に引き継がれて行くのかをみる。嘉永期に惣山奉行下代であった杉原謙治と杉原順吉を例にとる。杉原順吉は杉原謙治の養子であり、後に惣山奉行下代になった。

さて、杉原謙治には、子供がなかった。そこで、嘉永3(1850)年12月6日には実弟が16歳になっ

たので養子にするように願上げ、認められた。さらにこの養子順吉が16歳になったので惣山奉行下代見習にする様に願上げたが、これも認められ勘定吟味役から言い渡された。この惣山奉行下代見習に、謙治も天保12(1841)年召し出され勤めたし、また謙治の実兄で先代寛助も文政13(1830)年より勤めた<sup>68)</sup>。これをみると、惣山奉行下代は先代が生存中に引継者が見習として勤めたことがわかる。

杉原謙治は子供がなかったので、実弟順吉を養子として見習わせたが、謙治も寛助の養子であった<sup>69)</sup>。しかし、養子に引き継がせたのは実子が無かったからであり、普通は実子があれば実子に引き継がれたと考えられる。

以上、惣山奉行下代の引継ぎについて述べたが、惣山奉行下代の後継者は、先代が生存中に見習となって勤めており、その後惣山奉行下代職を引き継いだのである。

惣山奉行下代は、阿仁銅山の手代頭となることがあった。

元禄14(1701)年に阿仁銅山が御直山となった後に手代頭となったのは、惣山奉行下代であった安東幸左衛門であった<sup>70)</sup>。安東幸左衛門は、初代手代頭加々美半兵衛死後は小沢銅山を検分し、正徳3(1713)年よりは手代頭として山中に在番した。そして、正徳3年・4年仕法を実施し、藩の御直山への支配を強化し仕入から生産、荷売まで管理して、阿仁銅山の専売制を実施した<sup>71)</sup>。

秋山喜右衛門が阿仁銅山に廻した元文2(1737)年、同4年、寛保元年に手代頭の一人に安東与次兵衛がいたが、これは安東幸右衛門の子であり、惣山奉行下代であった<sup>72)</sup>。

また、延享2(1745)年に小沢銅山で改革が実施され、惣仕入れの減少を旨とした改革が行われた。この時小沢銅山の手代頭となったのは、惣山奉行下代の杉原伝兵衛であった<sup>73)</sup>。杉原伝兵衛は、明和元年9月まで勤めた<sup>74)</sup>。

さらに、明和6年の阿仁銅山改革の時、八森銀山の支配人加々美半兵衛が改革に加わり、小沢真木沢並び脇山の支配人となると同時に惣山奉行下代に任じられた<sup>75)</sup>。

この様に、惣山奉行下代が手代頭になる傾向があることが分かる。また、惣山奉行下代が手代頭になるときは、だいたい銅山にたいして改革が行われた時が多い。改革時には、改革をスムーズに実行してくれる者が必要であったし、それが山の支配人、つまり手代頭だと都合が良かった。また、藩の意図通りに改革を実施するのには、藩の役人でさらに鉱山の知識を持った者が望ましい。この2つの要求を満たすものとして、惣山奉行下代が手代頭となることがあった。そして、改革実施後もそのまま手代頭として残り、子孫が手代頭になることがあった。これは、安東与治兵衛が例にあげられる。

惣山奉行下代で手代頭となった者は、手代頭となったときでも惣山奉行下代であった。また、手代頭をやめたとしても惣山奉行下代であることは変わらなかった<sup>76)</sup>。つまり、惣山奉行下代はその者に付いている家格の様なものであった。

手代頭のうちでも惣山奉行下代で手代頭になった者とそうではない手代頭では、手当や賞美の額が違っており、惣山奉行下代から手代頭となったほうが多かった<sup>77)</sup>。また、銅山の中でも手代頭の中では中心的存在であり、指導的役割を担った。従って、手代頭以下を支配していたといえる。

惣山奉行下代の居場所は、山元ではなく久保田であった。元文2年秋山喜右衛門が阿仁銅山に廻山

した時に惣山奉行下代杉原伝兵衛もやってきたが、そのとき久保田からきたこと<sup>78)</sup>、また、延享2年に同じく杉原伝兵衛が小沢銅山の手代頭に任命された時、自分だけ小沢に行き妻子は当分は今まで通り久保田に住んでも良いこと<sup>79)</sup>、文化年間の惣山奉行下代杉原長治が久保田に住んでいたことからわかる<sup>80)</sup>。

### 3. 手代頭、支配人以下の職制

手代頭、支配人以下の職制であるが、山元で働く役人である。ただし、御直山である阿仁銅山の役人を中心にみていく。御直山は藩営鉱山である一方、受山は支配人の裁量に任されているので、受山の支配人以下は正確には役人と言えないからである。

山元での役人の頭は、手代頭、支配人である。手代頭は、小沢山を中心とした阿仁銅山の山役人の頭を言い、支配人はその他の鉱山の山役人の頭を言う。ただし、阿仁の場合も天明8年以降は支配人と呼ばれた。天明8年12月28日銅山奉行林七郎が、小沢銅山に登山し改革を行った。この時に前手代頭を放ち、真木沢小沢を一まとめとし惣山手代頭を任命した。そして、惣山手代頭と言う名称を改め支配人としたのである<sup>81)</sup>。

手代頭となる者は、山師または惣山奉行下代であった。また、明和3年に阿仁銅山の受山仕法では、御山師が手代頭となった<sup>82)</sup>。

手代頭は、惣山奉行または惣山奉行兼帯職の支配を直接受けたが、惣山奉行下代が手代頭になると惣山奉行下代ではない手代頭よりも優位に立ったため、直接山を支配していたといえる。

手代頭の手当をみていこう。享保10年の場合小沢銅山には、手代頭は安東幸左衛門と菅原新兵衛であった。安東幸左衛門は惣山奉行下代である。安東幸左衛門の場合は、惣山奉行下代としての手当8人扶持給銀7枚の他給金20両であり、菅原新兵衛は給金35両であった<sup>83)</sup>。また、長期にわたって務めるなど出精すると扶持や給金が増された。なお時代が下るが、文化年間には支配人は後掲表6の通り

表5 享保10年阿仁銅山手代頭、手代人数・給金

小沢山 手代頭	2人				
手代		計	36人		
銀錢請払役	6-13両	3人		三枚山手代	15両 1人
帳元役	10カ13両	2人			
本番役	6-15両	4人		二ノ又山手代	15両 1人
鉋方役	10カ13両	2人		板木沢手代	20両 1人
床屋役	10カ13両	2人		帳元役	10両 1人
炭方役	10両	2人		本番役	7両 1人
木方役	6カ10両	3人		山廻役	7両 1人
売場役	10両	2人		大沢山手代	20両 1人
山廻役	10カ13両	4人		帳元役	10両 1人
銅掛役	6両	1人		本番役	7両 1人
外廻役	6両	1人		山廻役	7両 1人

(「秋山光春日記結要」より作成)

表6 文化年間支配人以下手当（1か年）（「旧書集据」巻8より作成）

	給 銭	扶持米	合 力	焼 木	炭
支配人	100貫文	6 石	25貫文	600本	240貫目
手代	65貫文	3 石 6 斗	<div> 山廻・鉦方役 8 貫文  米方・帳元・売場役 7 貫文 </div>	480本	180貫目
下役	45貫文	3 石 6 斗	<div> 山廻 7 貫文  鉦方 6 貫文  帳元・米方 5 貫文  売場・炭木方役 </div>	480本	180貫目
手伝役	25貫文	3 石	<div> 山廻 5 貫文  鉦方・帳元 4 貫文  売場・米方 炭木方役 5 貫文  家勢手伝役 </div>	360本	120貫目
小使役	12貫文	3 石	5 貫文		
宮仕	7 貫 200 文	1 石 8 斗			
宮仕無給		1 石 8 斗			
合力宮仕	1 貫文	6 石	(味噌24貫目)	300本	120貫目

註 手代、下役、手伝役の合力は、それぞれが担う役によって異なる。

支給されていたが、手当は金ばかりではなく銭、扶持米、焼木、炭であり、現物支給の割合が高くなっている。

次に、手代頭以下の役人を簡単に触れておこう。

享保10年の場合、手代頭の下には手代がいた。そして表5にあるように様々な役を分担していた。

また、手代の下には、下役、手伝小役、小遣、小遣小役、宮仕小遣等がいた<sup>84)</sup>。

手代以下は、延享年間は整備されていなかったが、文化年間になると整備される。表6であるが、支配人以下手代、下役、手伝役、小使役、宮仕、宮仕無給、合力宮仕がいたことがわかる。そして、その手当も細かく規定されていた。

またこれ以降であるが、銅山役列として、下代、支配人、主役、御直山方、重手代、重手代並、手代手伝役、小使、本給無、同扶持付、隠居形諸役手付等の役職があった<sup>85)</sup>。

この他小沢検使等の小役人がいるが、今回は省略する。

## 結 び

銅役人の職制について3つの階層から述べてきた。1. 奉行職では、銅役人は、一騎相当で、惣山奉行または惣山奉行兼帯職であったこと、2. 下代では惣山奉行下代の職制を述べ、①惣山奉行兼帯職支配下②手代頭、支配人支配③足輕の身分④手当5人扶持給銀7枚⑤惣山奉行下代の世襲⑥手代頭となる可能性⑦久保田在住等、3. 手代頭、支配人以下の職制ではその役職と手当について、それぞれ述べた。

最後に3つの階層の役割分担について述べる。つまり、それぞれの階層が銅をめぐるどの様な働

き、活動をしていたのかを述べ、まとめたい<sup>86)</sup>。ただし、この銅役人の活動については稿を改めて詳しく述べたいので、簡単に述べることにする。また、時期は宝暦5年に再設置された本方奉行の時期とする。

本方奉行は、秋田、江戸、上方に置かれていた。江戸では、幕府の老中、勘定奉行、長崎奉行と主に長崎御用銅の交渉を行った。大坂では銅座との交渉、銅問屋、銅吹屋との関係があげられる。秋田では銅関係の評議を同役や家老と行い、御山師に銅山へ下銀させ、手代頭、支配人、御山師の任免等を行い、銅山で改革が行われると廻山した。

惣山奉行下代は、本方奉行の決定事項（例えば支配人の任免等）を取次ぎ、支配人に伝えた。また、支配人の願い、報告等も取次ぎ本方奉行に伝えた。さらに阿仁銅山の手代頭となり、銅の生産を直接指揮することもあった。この様に、鉱山と本方奉行の仲立ちをしていたのである。

手代頭、支配人以下は、手代頭指揮下直接山で銅の生産に関わった。

この様に、3つの階層の役人が銅の生産から売買までそれぞれの役割をはたし、この役人によって秋田藩は銅を支配したのである。

#### 〔註〕

- 1) 佐々木潤之介氏「近世産銅政策についての一考察」(史学雑誌66-11、67-1)、同氏「秋田県史」(銅山の部分)、石川博資氏『日本産金史』、渡部紘一氏「近世米代川舟運と南部領銅の廻銅」(秋田県立博物館研究報告11号)、荻慎一郎氏「近世における院内銀山の金生産」(地方史研究211号)、同氏「近世後期における金山の生産工程と住民構成」(秋大史学33号)等。なお、秋田の鉱山については、小葉田淳氏、佐々木潤之介氏、山口啓二氏、荻慎一郎氏等の著名な研究がある。
- 2) 「秋田県史」第2巻 近世編上 p.140.
- 3) 「石井忠運日記」(一) p.331.
- 4) 「秋藩分限帳」(国立史料館蔵)。
- 5) 本方奉行の職制に触れたものは少なく、大正版「秋田縣史」、昭和版「秋田県史」ぐらいである。
- 6) なお、「秋田県史」資料編では、寛文6年になっているが、「秋藩紀年」では寛文3年になっている。「秋田県史」では、寛文3年の方を説いているので、わたしも「秋藩紀年」通り、寛文3年とする。
- 7) 「梅津忠宴日記」(抄) 延宝4年2月27日(秋田県立図書館蔵)。
- 8) 「秋田県史」第2巻 近世編上 p.145.
- 9) 7)と同じ。
- 10)11) 「多賀谷隆家日記抄」(秋田県立図書館蔵)。
- 12) 「秋田県史」資料 近世編上 p.155.
- 13) 「秋藩紀年」。
- 14) 「秋田県史」資料近世編上 p.162.
- 15) 「秋田県史」資料近世編上 pp.162-63.
- 16) 『国典類抄』(嘉部二) pp.261-62.
- 17) ②の始めよりここまで「鉱夫雑談」巻一(秋田県立博物館蔵)参照。
- 18) 7)と同じ。
- 19) 「梅津忠宴日記」延宝3年12月16日。
- 20) 『国典類抄』(嘉部二) pp.259-260.
- 21) 『国典類抄』(嘉部二) p.260.
- 22) 『国典類抄』(嘉部二) pp.261-262.

- 23) 「享保十年十月秋田郡阿仁銅山次第聞書」(秋田県立図書館蔵)「元禄十四巳年十一月御会所被立置候以後御勘定奉行兼役ニ而勤候惣山奉行被相止、御家老之内梅津半右衛門殿惣山方支配被仰付、御本方奉行之内清水忠兵衛、村山九左衛門、副役之内武石安左衛門山方兼相勤候節、(後略)」。
- 24)25) 「秋田県史」資料近世編上 pp. 162-163.
- 26) 「御日記書抜」(5)貞享四年九月十五日「一、梅津儀本方役人一人ニ而難相勤之旨依申立、向後月番之老中段々可相勤之旨被仰渡之」。
- 27) 『国典類抄』(嘉部二) p. 647.
- 28) 同上 p. 648.
- 29) 同上 pp. 261-262.
- 30) 『国典類抄』(嘉部二) pp. 270-271 等。
- 31) 『国典類抄』(嘉部二) pp. 285 以降。
- 32) 同上 p. 288.
- 33) 同上 p. 292.
- 34) 『国典類抄』(嘉部二) pp. 315-316.
- 35) 「享保年中記録」(秋田県立図書館蔵)。
- 36) 同上(享保十六年九月)。
- 37) 『国典類抄』(嘉部四) p. 711.
- 38) 「石井忠運日記」(歴史図書社)。
- 39) 筆者修士論文「秋田藩銅役人の研究」より。
- 40) 22)23)参照。
- 41) 「旧書集摺」目録(秋田県立博物館蔵)。
- 42) 「秋山光春日記結要」(同館蔵)等。
- 43) 「御廻銅高調」(秋田大学付属図書館蔵)。
- 44) 「阿仁銅山次第聞書」(秋田県立図書館蔵)。
- 45) 「石井忠運日記」。
- 46) 以上「秋田縣史」、『国典類抄』(嘉部五) pp. 564-577、「鉞夫雑談」(秋田県立博物館蔵)より。
- 47) 「院内銀山記」諸役人衆新参の事(内閣文庫本)「(前略)次に梅津主馬・川井嘉兵衛六ヶ年の政務執行に去る程に、下交代なくては叶ふまじと諸浪人の中より器量有るものを選び出しぬ義に、先ツ沓番に備前の国の先方にて浮田中納言殿の臣に田太市右衛門、式番に越前佐藤善左衛門、三番に中村舎人なり、(後略)」。
- 48) 「院内銀山記」。
- 49) 「秋山光春日記結要」「(前略)正徳二辰十一月於山元ニ病死、頭手代無之ニ付惣山奉行下代の内安東幸左衛門同十二月俵ニ被指越(後略)」。
- 50) 同上「(前略)北国屋者式拾七八ヶ年之間小沢方稼候由事ニ候、銅箇ニ而調之儀者水無村於番所ニ調被仰付運上被召上候、此調方安東幸左衛門祖父土佐と申候由、元来秋田銀山之人にて銀山ニ居候所、右調役人ニ被仰付候而(後略)」。
- 51) 1. 奉行職の職制参照。
- 52) 『旧書集摺』目録「御勘定所御日記之内」「享保十乙巳八月四日評定所江帶刀出席小野岡形部右衛門・大山又右衛門を以此度御改ニ付只今迄御本方奉行支配致候者直々御勘定奉行支配ニ被仰付候段其外諸役江申渡候次第左之通、一、惣山奉行之事、此度兼役被仰付候、依是阿仁銅山御検使、同所御米蔵役、荷上場御番人、大葛金山江被附置候支配御目附等役支配被仰付候、其外銅山御山師、惣山奉行下代等可被致支配候、惣而山中致方相改候筋茂可有之候間、先々一兩人茂銅山江参候而致吟味候様被仰出候事、(後略)」。
- 53) 「秋山光春日記」。
- 54) 『旧書集摺』目録「安永二年本方奉行分限帳」「一、吟味役、一、諍馬役、一、大木屋役、一、諍馬代銀請取役、一、林取立役、一、御大工頭役、一、御染物師、一、御大工并横手角館御大工共、一、御壁塗、

一、御塗師、一、御船頭、一、御昼刺、一、惣山奉行下代、一、御升取、一、御萱手、一、惣御蔵守、一、御金掛、一、御雑用所手代、一、同所小遣、一、大木屋定抱人足、一、阿仁銅山炭木山守、一、同所銀山御蔵御升取、一、同所当番。

- 55) 「秋田沿革史大成」(加賀谷書店)。  
56) 「鉱夫雑談」、以上奉行職の職制の変遷は1を参照。  
57) 「秋藩分限帳」(国立史料館)等。  
58) (銅山覚)(秋田県立博物館蔵)。  
59) 「秋山光春日記結要」(秋田県立博物館蔵)。  
60) 「阿仁銅山次第聞書」(秋田県立図書館蔵)。  
61) 『旧書集摺』目録。  
62) 「秋田沿革史大成」。  
63) 「院内銀山記」。  
64) 荻慎一郎氏「近世院内銀山の金生産」(地方史研究 211号)。  
65) 「銅山方留書」「(前略)但右伝兵衛儀へ近年迄阿仁御手代頭相勤候へとも老年ニ付当時隠居致相在候、同人共杉原専右衛門当時阿仁へ御用有之罷越候、」。  
66) 「石井忠運日記」(3) p. 139。  
67) 『旧書集摺』「宝永四年 院内銀山御近山御普請千枚南沢四百まへ右三ヶ処件数下り斗書上帳」端書 兵助写「右書付明和五年子七月中山崎弥平次院内銀山へ金沢典膳殿御登山之節親専右衛門共同道ニ而当山ニおいて写取書付候也、(後略)」。  
68)69) 58)と同じ。  
70) 「秋山光春日記結要」。  
71) 『旧書集摺』卷五等。  
72) 「秋山光春日記」元文2年 元文4年 寛保元年。  
73) 「秋山光春日記」延享2年8月24日。一、「惣山奉行下代杉原伝兵衛小沢御手代頭北村茂助同役申渡候、(後略)」。  
74) 「秋田鉱山諸銅鉛万覚書」(秋田県立図書館蔵)。  
75) 「八森銀山留書」(秋田県立博物館蔵)、「石井忠運日記」p. 139。  
76) 例えば杉原伝兵衛は、延享2年より阿仁銅山手代頭兼惣山奉行下代であったが、明和元年に手代頭を辞して隠居しても惣山奉行下代であった。  
77) 「秋山光春日記」元文四年等参照。  
元文4年は、惣山奉行下代の安東与次兵衛は銀10枚、惣山奉行下代でない山口太次右衛門は、銀5枚であった。  
78) 「秋山光春日記」元文2年8月29日「一、惣山奉行下代杉原伝兵衛去ル廿七日久保田出立昨晚麻生村ニ泊リ候由、暮時以前着之砌野合にて逢可申候、右者相葉一取沢大湯沢所々銅山ニ見分可為致、殊ニハ伝兵衛銅山方ハ馴不申候故、当山之様子見分可為致、且去年以来脇四ヶ山ハ買方ニ成候故下代召連候義先例茂在之候ニ付、旁出立前申付候故参申候、」。  
79) 「秋山光春日記結要」延享2年8月「同廿五日 一、杉原伝兵衛昨日吟味役を以申渡候節至極及辞退候、尤可相勤旨申含候、且書付を以申出候ハ、妻子引越候様ニ被仰付候得共、当分思慮も有之唯今迄之通久保田ニ差置度候、私者小沢御台所之内ニ差置被下度由申越、今般中も尤ニ被聞届願之通申渡候、(後略)」。  
80) 「天財録」(秋田県立博物館蔵)裏書。  
81) 『旧書集摺』卷八。  
82) 『国典類抄』(雑部二)。  
83)84) 「秋山光春日記結要」。  
85) 「秋藩分限帳」。



86) 筆者修士論文より。

(本論文は、筆者修士論文「秋田藩銅役人の研究」の第2章、第5章第1節を中心に修正加筆したものです)。